
兵庫県伊丹市大字 岩屋の小字地名

■岩屋の概要

岩屋村は、伊丹市の東端に位置し、大阪府豊中市に隣接する千里山丘陵の西の微高地である。南は尼崎市田能村（弥生式田能遺跡付近）に隣接し、南端は猪名川に接している。

地名由来について1814年（文化11年）頃に書かれた紀行文『岩屋村紅葉紀行』ではかつて当地に窟（いわや）が存在したことを由来とする説を紹介している。江戸時代には窟村（いわやむら）とも書かれ、紅葉の名所として『摂津名所図会』に紹介されている。岩屋集落は、昭和39年からの大阪国際空港第二次拡張により、3つに分れた。すなわち、1は西の「字桃ヶ本」「字町田」付近に、他の2つは、森本地内の「字長山」「字上須古」に移転となった。これ以前の岩屋村は、見渡す限りの水田穀倉地帯であった。この水田は古く、条里制の名残を名実ともに、そのまま、今に伝える貴重なものである。

市史研究紀要「たからづか」創刊号（八木哲浩氏）によると、条理は川辺南条に属し、岩屋村は、一里一条、二里一条に、そのほとんどが含まれるのである。

一里一条

- 一ノ坪 走井村（豊中市）
- 二ノ坪 四反田
- 三ノ坪 四反田（ヨウダ）
- 四ノ坪 上岩屋
- 五ノ坪 七力
- 六ノ坪 七力
- 七ノ坪 三反田長（クスガモト）
- 八ノ坪 三反田長
- 九ノ坪 横長
- 十ノ坪 中岩屋
- 十一ノ坪 宮浦
- 十二ノ坪 勝部村（豊中市）
- 十三ノ坪 勝部村（豊中市）
- 一十四ノ坪 宮浦
- 十五ノ坪 中岩屋
- 十六ノ坪 横長
- 十七ノ坪 カンレ（カネヒラ）
- 十八ノ坪 カンレ（カネヒラ）
- 十九ノ坪 町田
- 二十ノ坪 町田
- 二十一ノ坪 矢ノ坪
- 二十二ノ坪 矢ノ坪
- 二十三ノ坪 下岩井

二里一条

- 一ノ坪 下岩井・狐
- 一ノ坪 狐
- 三ノ坪 三ノ坪
- 四ノ坪 下四ノ坪
- 五ノ坪 下四ノ坪（五ノ坪）
- 六ノ坪 口酒井字六ノ坪
- 七ノ坪 口酒井字七八ノ坪
- 八ノ坪 口酒井字七八ノ坪
- 九ノ坪 九ノ坪
- 十ノ坪 三ノ坪
- 十一ノ坪 狐
- 十二ノ坪 中豊島村（豊中市）
- 十三ノ坪 中豊島村（豊中市）
- 十四ノ坪 狐
- 十五ノ坪 梶ヶ本
- 十六ノ坪 九ノ坪
- 十七ノ坪 田能字八ノ坪（尼崎市）
- 十八ノ坪 田能字八ノ坪（尼崎市）
- 十九ノ坪 田能字九ノ坪（尼崎市）

- 二十四ノ坪 . . . 勝部村(豊中市)
- 二十五ノ坪 . . . 下岩井
- 二十六ノ坪 . . . 下岩井
- 二十七ノ坪 . . . シンジ
- 二十八ノ坪 . . . シンジ
- 二十九ノ坪 . . . エノコダ (ウリコ)
- 三十ノ坪 . . . エノコダ
- 三十一ノ坪 . . . 桃ケ本
- 三十二ノ坪 . . . 桃ケ本 (スズ田)
- 三十三ノ坪 . . . 上四ノ坪 (フリガツボ)
- 三十四ノ坪 . . . 上四ノ坪
- 三十五ノ坪 . . . 下岩井
- 三十六ノ坪 . . . 下岩井

石高および領主の推移

慶長 10 年国絵図	381 石 100 合
元和 3 年郷帳	380 石 100 合
正和 2 年郷帳	380 石 100 合
享保 20 年郷帳	380 石 100 合
天保 8 年国絵図	382 石
明治 3 年郷帳	382 石 7633

はじめ直領であったが、寛永 3(1626)年 4 月 6 日、阿部氏(正次)の所領となる。
 慶安元(1648)年 7 月 27 日、公收された。
 これに先だち、同年 6 月 26 日保科氏(正貞系)の所領となって明治にいたった。
 (伊丹古絵図集成より)

岩屋の小字

1. 貝廻り (カイマワリ)

この区域は、南北に長い岩屋地区の最北地区であり、その北側は西桑津字高坪と隣接しており、地元では「上の街道」とよんでいる県道(現県道伊丹・豊中線)および「九名井(クメユ)溝」が東西にはしっている。そのほぼ中央で「七力の樋」といわれるところから取水する用水溝(七力の溝(後述)といい、深いものであった。)は、この区域を東西に二分し、東側を「字カイマワリ」、西側を「字タカツボ」という。

寛政 8 年(1769)、中村井組三村論所立会絵図によると、西桑津字高坪より、当区域

「字カイマワリ・タカツボ」に「二本一組の竹の笥」が各一組ずつ掛けられており、西桑津の「落ち水」による水利であった。飛行場拡張前まで、行われていた。これは、地租改正時にもみられ、すなわち、「字タカツボ」の西側を流れる「イシウト溝」には、岸があり、また、東を流れる「七力の溝」にも岸の表示がある。用水溝が深く、「字カイマワリ・タカツボ」に直接、水を入れることが出来なかったことを物語っている。

「字タカツボ」は条里制の「坪地名」と、水利の便からの「高い土地」で「高坪」と思われる。隣接の「西桑津字高坪」と同じものであろう。

「字カイマワリ」は「九名井溝」がこの地区の東南で大きく南へ曲がっていることから、「カキ（掻く・接頭語）・マガリ（曲り）」の意と推察する。この「字タカツボ」には昭和15・6年頃まで、神津村の「ひき病院（伝染病院）」があった。

近隣類似地名 安倉字皆廻り・米谷字皆廻り（宝塚市）

2. 七力（シチリキ）

「七力の溝」とは「字貝廻り」の北側、九名井の取水口より（水車を利用しなければならぬほど低い所から取水していた）、この区域の中央を通り、「字三反長」の南（字カンレの入り口）までの用水溝をいう。そして、この用水溝の東側を「字シチリキ」、西側を「字クスガモト」という。

岩屋村田地絵図（年代不明）によると、この区域は「字ヒモノカマエ」との記載があり、「字クスガモト」は、この南の三反長の場所に、その記載があり、若干の「ズレ？」がみられる。

この「七力の溝」は、田植えの灌水前の時期に、村中全員で、溝さらえをする。これが午前中、午後からは、二手に分れ「貝原樋門」から、猪名川に通じる「狐川」と「字梶ケ本」の西の水路の川さらえを行った。これは、非農家の人たちも加わっている。居住区を水害から守るための日役であり、飛行場拡張前まで行われた。

古老の話によると「字七力（含 字タカツボ）」は（酒の）三升壇を余分に付けなければ小作する人がいなかったほど、水利に苦労があった。という。

地名の由来については不詳であるが、「ひちりき（箏篳）」とは、雅楽の管楽器、奈良初期中国より伝来とある。

3. 三反長（サンダオサ）三反長サ

この区域も「七力の溝」により、東西に分けられている。

この区域への取水は、「七力の溝」の南側をセキ止め、水位を上げて取水していた。
類似名 東桑津字上三田（反）長・下三田長

4. カンレ

この区域も中央部を南北にはしる用水溝により、東西に分れ、東を「字カネヒラ」、西を「字カンレ」という。

地名の由来については不詳であるが、「広辞苑」では「冠礼（かんれい）」加冠の礼式。元服の式。とある。

5. 横長（ヨコサ）横長サ

本来は「ヨコオサ」であるが「ヨコサ」と呼んでいる。

地名の由来は地元では、田の形態が東西にあるところから、「ヨコサ」という。しかしながら、他にも、田一反（段）の形態が東西に長いところは「字貝廻り」「字七力」「字エノコダ」「字桃ヶ本」「字四ノ坪」「字三ノ坪」「字九ノ坪」と多くあり、これらは条里長形地形の、東西、南北の並びは取水方法によるものである。

同一地名： 中村字横サ・・・これは、村の中心部（宅地）の横の田地であるところから、「横サ」ということが推察できる。

6. 上岩屋（カミイワイ）

7. 中岩屋（ナカイワイ）

縦に長いこの地域の北部中央部から南西にかけて「字上岩屋」「字中岩屋」「字下岩井」が続いている。それが「イワイ」と呼ばれていること、さらに、集落の中心部（すべての家屋があり八幡神社、福勝寺および村墓）が「字中岩屋」でなく「字下岩井」になっているのか、興味をひかれる。「字中岩屋」の西には、前述の集落の横の田地の意味の「横長」が隣接しているのに・・・。

岩屋旧集落調査報告（昭和43年1月）では、「江戸期の前半に集落の形態にまで影響する大きな改革期を経たことが考えられる。」とある。

8. 矢ノ坪（ヤノツボ）

「〇の坪」は条里制の地名の名残であり、当地域において、多くみられる。

9. 町田（マッタ）

大言海によると「田と田の間の路」・・・もとは田の中の一区域の称で、間路（マジ）とある。

類似地名：東桑津字町田・御願塚字七町田

10. エノコ田（エノコタ・エノコダ）

当区域の東半分を「字ウリウ」、西を「字エノコタ」という。

エノコ・・・犬の子「広辞苑」

岩屋地区において、イノコ神事が行われている。10月の中の「亥の日」に行われている。

古老に聞くと

イノコの晩に、重箱ひろて

開けて見れば 十兵衛さんの金玉

夕べもろうた 花嫁さん

けっこうな ○○しばられて

ボタモチ一つで祝いましょう、祝いましょう

と歌いながら大地を叩くと、霊力が湧いてくる。豊作の祈願で男と女がした。

これは農耕儀礼の原始的要素を持つものである。

アユノコト・・・能登地方では、旧暦11月4日か5日を「田の神迎え」とも「アユノコト」ともいい、・・・田の神をアイノカミという。

「日本民俗資料事典」

田能遺跡（尼崎市）においては「エノコの実」が出土している。

近隣同一地名：尼崎市戸ノ内字エノコダ・尼崎市潮江字ウリウ

11. シンジ

当地区の東端を「字カイチ」、西を「字ヤシキ」と呼んでいた。

地名の由来は不明であるが、「広辞苑」によると

神事・・・神を祀る儀礼

神璽・・・皇位のしるし。古くは護身の鏡と劔で、のち祭祀の対象となる。「八咫の鏡」「草薙の劔」「八尺瓊勾玉」を加えて三種の神器という。

12. 上四ノ坪（カミシノツボ）

当地区の東半分は前述二里一条の「三十四ノ坪」にあたり、後述の「字下四ノ坪」の東半分は「四ノ坪」にあたる。上下は北と南の「四ノ坪」という意味。また、西半分を「字フリガネツボ」という。文化12年頃の「岩屋村紅葉紀行」にある「もみじ畑」は当地区の東端にあり、その西に隣接する「字小岩井」の間を「狐川」が流れていた。

13. 桃ケ本（モガモト）

東半分は「スズ田」と呼ばれ、西半分を「モガモト」という。桃の木に関係する由来は無いといわれている。「モ」に桃源郷の佳字を充てたと思われる。

14. 下四ノ坪（シモシノツボ）

前述したが、東半分は「四ノ坪」であり、西半分は「五ノ坪」になる。

15. 三ノ坪（サンノツボ）

縦に長い区域で、北半分が「三ノ坪」で、南半分は「十ノ坪」にあたる。

16. 九ノ坪（クノツボ）

この区域も縦に長く、北半分が「九ノ坪」で、南半分は「タネモリ」と呼ばれていた。

「八ノ坪」も当地区にあったが、「園田村、明治22年6月入込地ニ付き引継受」とある。

17. 梶ケ本（カジガモト）

西に隣接する森本字上梶・下梶がある。

18. 鶴田（ツルタ）

当地区の南端にあり、猪名川の河川敷を含めた、かなり広い部分で、田能の飛び地を南から抱き込むような形の区域である。しかし、田能村の人が大部分、この区域を出作しており、岩屋の耕作者は一人であった。地形は大変低く、村中を流れてきた狐川が、猪名川に出会う所に「鶴田の樋」があった。田植えの時期に、この樋を閉めると、水は逆流し、田んぼ一面が湖のようになったという。

鶴田・・・水路のある低地。鶴・津流・弦あるいは鶴瀬などの地名があり、津流と書けば幾分実際に合うことになる。「地名の探求」（松尾俊郎）

市内同一地名：荒牧字鶴田・荻野字鶴田・森本字鶴田

19. 狐（キツネ）

集落の中心部「字下岩井」の南から、細長く、豊中市と隣接しながら、南端にまで、非常に細長く、しかも、一番広い区域で、四町8反もある。（もちろんこの中には、猪名川の河川敷の（地目が）寄洲・官地および（地目）藪が一反七畝含まれている。）昔はこの区域の南側は猪名川の土堤となっていた。また、西側を前述の狐川が流れていた。

古老の話では「尼の津」から、藻川を経て、この狐川まで、船が入り、この船で、狐川にかかっていた石橋や、八幡神社の鳥居等が運び込まれたという。また、大昔、岩屋の墓は、この「狐」「鶴田」の川辺にあったが、水をかぶりやすかったので、高い所に移したという。現在「狐の樋」は岩屋センターの庭に保存されている。また、当時の台風時の水位が電柱に記されている。

地名の由来は、藪が多かったので「狐」？

市内類似地名：天津字狐藪・寺本字狐塚・伊丹字狐塚

20. 下岩井（シモイワイ）

集落の中心部で「当地区の最も西」で、伊丹市の最西端になる。

1. 当地に窟（いわや）が存在したことを由来とする説
2. 岩井（美濃）・・・今巖美村の大字とす。栗野の東、長良の北なり。新撰志云、岩井または岩屋と称し、延算寺薬師堂あり、とある。

岩井、岩屋はともに同意語と考えられる。

イワイ・・・神を祀るイワイ（斎）・・・「大日本地名辞書」（吉田東伍）

21. 宮浦（ミヤウラ）

集落の北にある八幡神社に隣接しており、文字通り「宮浦」である。地内には岩屋村の墓があり、確認できる最古のものは「元禄期（1688～1704）」のもので、七郎右衛門の墓石

22. 四反田（シタンダ）

当区域の西側、豊中市との境界を「九名井」が流れており、「字ヨウダ」と呼ばれている所がある。

尼崎市史第10巻村絵図と、明治の検地帳を比較すると、下坂部字六反田（田 5反8畝）武庫庄五反田（5反6畝21歩）とあり、当地区も同様の地勢が考えられる。

ヨウダ・・・「～段のある所」のこと。上に数字をつけて接尾語的に用いられる。起源は開墾に伴うものというが、その時期は中世とも近世ともいう。

「地名用語辞典（楠原佑介）」

23. 高塚佐（タカツカサ）

尼崎市の飛び地で、「字八ノ坪」と反対に、「明治22年6月園田村ヨリ入込地ニ付き引継受」とある。

■岩屋村の神事（通過儀礼）

- ・ヨーネンコウ（幼年講）

1月14日の夜、コンニャクを炊く。

子ども（小学校4年生位）が、友達の家泊まる。子どもの寄合で翌朝3時頃まで行う。そして夜が明けると、ワラを積んでトンドを行い、豊年を祈る。

- ・祈念祭・年越の祭（春祭）

3月3日の祈念祭が、4月15日の年越祭と一緒に行われるようになった。

- ・虫除けのお札

7月下旬、虫除けのお札を各戸に配る。お札を竹にくくりつけて、田にたてる。お札には、大地主（オオトコヌシ）大神・御年（ミトシ）大神と書かれている。

- ・夏祭り・秋祭り

8月25日の夏祭（湯立て神事）が、秋祭りの10月22日に移り、今も「湯立て」は行われている。

- ・亥の子

10月中旬の亥の日に行われる。（10. エノコ田参照）

- ・新嘗祭

11月23日

- ・その他

伊勢講・・・・昭和16年まで行われていた。

火葬・・・・八幡神社北側墓地にて火葬した。かん台（蓮台）があった。

（文責：足立繁）